

# asia

世界の  
生産拠点  
アジア

## アジア最大の 消費市場へ

『上海・浦東地区開発プロジェクトに  
見る中国経済の躍進』

## アッサラム・ アレイクム

『イスラム原理主義の  
台頭に揺れる中東』

## カレーだけでは語れぬ インドの食文化

『インド＝カレーの正しい理解』

## マングローブが 泣いている

『エビ乱獲が教える  
東南アジアと日本の関係』

## 合コンだって真剣です

『ソウルで最良の伴侶を見つける方法』

## ペルシアの職人たち

イラン農村の絨毯工房から

“1923年国会の決議により  
設立された大学”



大東文化大学

アジアの証券市場の成長

	上場企業数			上場時価総額		
	85年末	93年末	85~93年 年平均成長率	85年末	93年末	85~93年 年平均成長率
日本	1,476	1,667	1.5%	9,482.6	28,999.3	15.0%
香港	279	477	6.9	345.1	3,852.7	35.2
シンガポール	316	331	0.6	110.7	3,046.7	51.3
台湾	127	285	10.6	104.2	1,928.8	44.0
韓国	342	693	9.2	73.8	1,394.2	44.4
マレーシア	284	410	4.7	162.3	2,146.5	38.1
タイ	93	347	17.9	18.4	1,301.9	70.3
フィリピン	137	180	3.5	6.7	393.1	66.4
インドネシア	24	172	27.9	1.2	328.4	101.7
中国	—	218	—	20.3	423.9	46.2

資料：「月刊資本市場」94.7

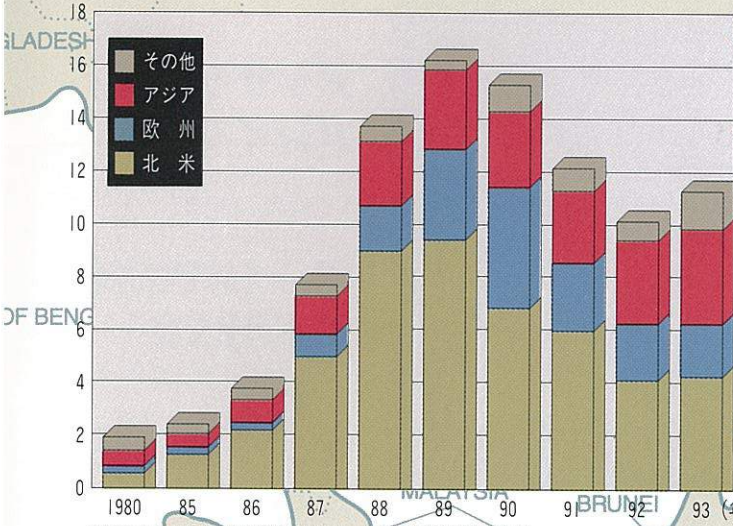


合コンだって真剣です  
『ソウルで最良の伴侶を見つける方法』

14

4

製造業の直接投資の動向



PACIFIC OCEAN

アジア最大の消費市場へ

『上海・浦東地区  
開発プロジェクトに見る  
中国経済の躍進』



マングローブが泣いている

『エビ乱獲が教える  
東南アジアと日本の関係』

12

# ASIAN DYNAMICS

## 世界の生産拠点・アジア

世界銀行が発表した「世界経済の展望と発展途上国」は、95年～96年の東アジアの実質成長率は8.1%になると予測した。また南アジアも、東に劣るとは言え、5.0%とやはり高率と見られる。先進国平均で2.9%、また世界全体でも3.2%という数字が並ぶ中、アジアの成長率は驚異的と言える。こうしたデータを支えているのは、「世界の生産拠点」としてのアジア、すなわち工業化の発達と、貿易国としての国際市場でのポジションの確立がある。アジアを学ぶこと、それはわずか5年後に迫った「21世紀の世界」を学ぶことにほかならない。



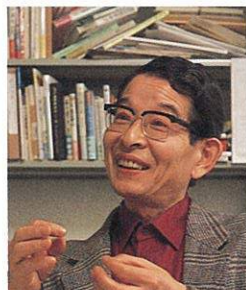
# ASIAN DYNAMICS



## アジア最大の消費市場へ

『上海・浦東地区開発プロジェクトに見る中国経済の躍進』

中国の南部、日本の長崎からはほんの800キロメートルの場所に位置する上海。揚子江の河口にあるこの都市は、多くの行政機関が集まる「政治の北京」になぞらえて古来から「経済の上海」と呼ばれてきた。だがその伝統の経済都市・上海にもここ数年、大きな変化が見られている。それは「外国資本の流入」である。日本をはじめ多くの国々が、中国の、アジアの消費市場をターゲットに跳梁跋扈する。はたして上海は、21世紀の「アジアの経済センター」たりうるだろうか。



小島麗逸(こじま れいつ)

国際関係学科教授  
一橋大学経済学部を卒業後、アジア経済研究所に入所。「一橋大学時代に第二外国語として選択したのが中国語だったことが、私の一生を決めた」という。本来、中国やアジアの農村研究がテーマだが、昨今は中国経済とアジアの都市問題にその中心を移している。

12億人口が、ついに「本気」を出し始めた

「日本、66%が中国」

今年4月23日、日本経済新聞の一面トップに掲載された記事の小見出しである。記事の一部を要約すると以下のようになる。

《米国ウォール紙と本紙が共同で行った日米世論調査によれば、今後20年間で外交上最も重要になる国》として日本の66%が「中国」を挙げた。また「10年後に最も強い経済力をもつ国はどこか」という設問には、やはり日本の55%が「中国」と回答。2位の米国(17%)を大きく引き離れた。

この調査はあくまで日米間の国民意識を探ることを主眼としていたが、少なくとも経済面においては日本の「米国離れ」中国接近を示唆する皮肉な結果

上海を東西に分かつ黄浦江を南浦大橋から見る。川の両岸には工業地帯が広がり、その周辺を高層住宅が取り囲む。伝統的な浦西の経済地区は、ついに浦東へとその領域を拡大し始めている。



が浮き彫りにされた。

だが、中国経済の将来性に注目するのは日本ばかりではない。例えば世界銀行(IBRD・国際復興開発銀行)は、中国・台湾・香港のいわゆる「中華経済圏」の経済が、2002年に米国の抜いて世界第1位になると予測した。IMF(国際通貨基金)や英国「エコノミスト」誌も中国経済の将来性を高く評価し、経済大国化を予測した。

今や世界中が注目する中国経済。その端緒には、1992年と1993年、2年連続で13%以上の高度成長を遂げたことが大きく影響している。また株式市場の動向から見ると、現在3000以上の国営企業が株式化され、上海地区では30銘柄が上場されている。中国企業の海外での上場も進んでおり、香港とニューヨークで十数社の上場実績がある。ロンドンや東京での

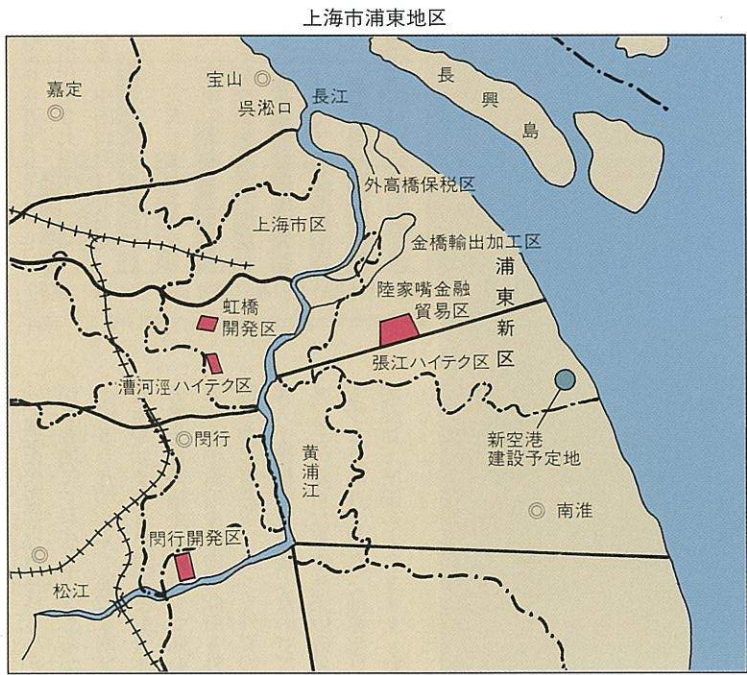


上海の中心地、外灘の中山一路に見られる光景は、「経済の上海」の縮図と言える。古くからの諸外国との交流がこの街を発展させてきた。社会主義国家に自由経済システムがどこまでその機能を発揮できるか。世界で初めての壮大な「実験」は既に始まっている。

**「経済の上海」の象徴、浦西地区。だがその急激な発展は市民生活を圧迫した**

「上海市のここ数年の街並みの変化は、驚くべきものがある。すね」  
 中国経済にも詳しい小島麗逸教授（国際関係学科）は、活況にある現地の様子をそう語る。「市街区と郊外が高速道路で結ばれ、黄浦江」については念願の巨大な斜張橋が完成した。西部

上場も計画されている。彼らは、ついに「本気」を出し始めた。



三菱総合研究所作成



開発が進む上海・浦東地区の中心部。古い町並みに変わって高層住宅が建設され、人々の暮らしも欧米の影響を受けつつある。

にある在来の「虹橋空港」から浦東地区に行くにはどこかこの川を渡らなければならないのですが、橋の建設が渋滞に追いつかないのが現状です。中心部の人口集中は推して知るべしです」

上海市は揚子江の支流である『黄浦江』を隔てて西と東に分かれる。その西地区を『浦西』、東を『浦東』と呼ぶ。広大な川は幅が一キロメートル以上に及び、日本人が想像する以上に海のイメージに近い。

「日本で言えば瀬戸内海の雰囲気に近い。物資や人の往来にも船が使われています」

1842年、アヘン戦争終結時に結ばれた『南京条約』によって、イギリスやアメリカ、フランス、そして日本など近代資本主義国家と最も接点が多かった『経済の上海』。その中心となったのは、西地区の浦西であった。『上海市区』とも呼ばれるこの浦西には、高層ビルが林立し、道路が整備され、鉄道が走り、

浦東地区に新しく完成した『上海万国証券公司』。日本で言う証券取引所である。中国では現在、国有企業の株式化が進んでおり、3000社以上が株式制に移行された。



新テレビ塔。一般市民の家庭にテレビが普及し、公共電波を通じて西歐式の文化に接触する。若者は町角でケンタッキーフライドチキンを食べ、コカコーラを飲む。



虹橋開発区など新しいプロジェクトも数多く進められている。成長著しい中国経済の縮図と言っている。

「ところが浦西は、発展し過ぎたためすべてが飽和状態になってしまった。交通渋滞だけでなく、急激なインフレなども市民生活を圧迫しています。そこで中国政府と上海市は、『世界に向け、現代化に向け』をスローガ

## 急がれる インフラ整備と 押し寄せる 外国企業の 開発競争

「上海浦東地区開発」は、浦東

んに『黄浦江』の対岸である浦東地区の開発をスタートさせたのです」

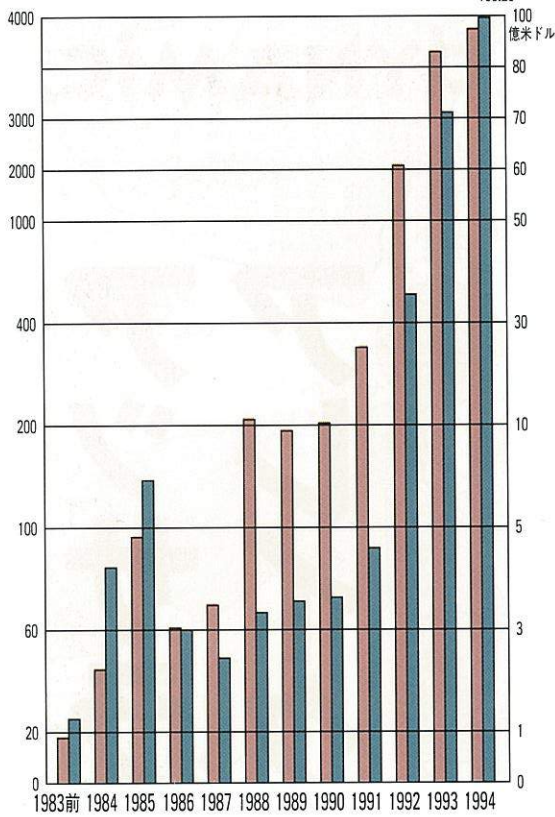
地区の約100万平方キロメートルを都市化する大規模な開発計画である。中国政府は最重要の国家プロジェクトとして位置づけており、完成予定の2000年には、華南の香港（1997年にイギリスより返還が決定している）と華東の上海を二大経済センターとして活用していくという。

小島教授は語る。

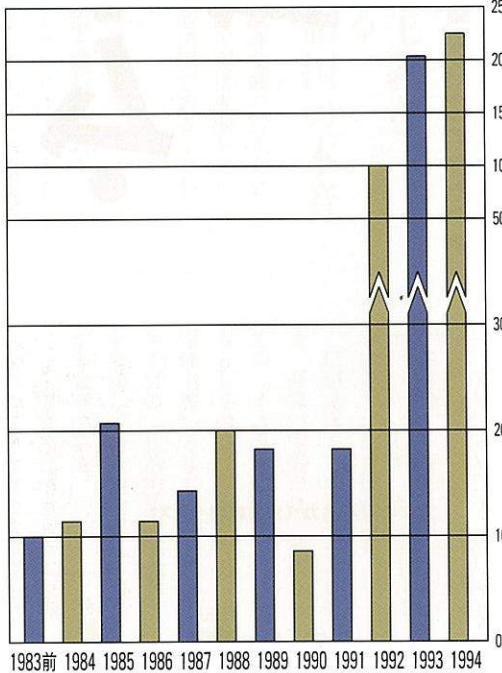
「浦東は開発以前はほとんどがさら地だったんです。ところが1990年頃から、急激な開発競争が始まりました。その資本の多くは外国企業の投資で賄われ、中国政府や上海市政府も外国企業の優遇策によって外資の導入を積極的に支援したわけです。その中には日本企業のものも少なくありません。浦東地区開発は、中国のというより、む

上海市例年の外国投資プロジェクト数と外資の金額

プロジェクト数 10741 外資の金額(億米ドル) 237.26



上海市外国投資企業のうち 総投資額1000米万ドル以上のプロジェクトの発展情(原)況



出所:「上海投資案内」上海市外国投資工作委員会編集

しろ新しい国際金融市場開発のための世界規模的プロジェクトと言っているでしょう」

だが「浦東開発」にはいくつかの解決すべき課題がある。中でも最大なのは、インフラストラクチャー(道路やライフラインなどの社会生活基盤)の整備であろう。世界一の人口を持つ中国の、最大の経済都市に、膨大な人口が集中するのは火を見るより明らかである。

「浦東を国際金融市場として活用していくならば、国際ハブ空港(主要拠点となる大空港)の建設なくしてプロジェクトは完遂しません。浦東開発区の東南の海沿いに建設が決定している新国際空港の完成が待たれるところですね」

浦東開発の最大のポイントとなる「新国際空港建設」は1986年にスタートした。竣工予定は1996年。10年を費やして完成する24時間稼働の新国際

空港は、昨年泉州沖に完成した「閩西国際空港」の5倍の規模を持つことになる。この新空港が完成すれば、既に手狭になっている虹橋空港をわずかに浦東地区に入れるばかりでなく、西と東を隔てる『黄浦江』の橋の渋滞をも回避できる。空輸による物流、あるいは人の往来がより便利になる。

こうした国を挙げてのインフラ整備と外国資本の積極的導入によって、浦東地区は急激な発展を遂げつつある。

小島教授が語る「驚くべき上海の街並みの変化」は、実はこれだから本番である。

## 4000年の歴史が近代化を妨げた

日本史の教科書を開くと、日本はその歴史の中で言葉など多くの文明を中国大陸から受け継いでいる。つまり日本にとって

中国は「文明の先生」であったはずだ。19世紀末までは中国の方がはるかに進んでいた。ところが近代史において、立場は逆転している。4000年という世界的に最も長い歴史をもつ中国が、他の先進国に比べて経済発展の遅れを取って来たのはなぜだろうか。

小島教授は二つの回答を示唆した。

「むしろ長すぎる歴史が近代化を妨げたと言っている。中国は歴史的に高度な文明を持つ国です。また多民族国家でもあり、民族ごとに独自の文化、言葉、習慣を持っています。彼らが自己の文明に固執したために、新しい価値観や文明を受け入れにくい体質が出来上がってしまったんです。それゆえ外国の文化や経済に門戸を開くのが遅れたと言えます。そしてもう一つ忘れてならないのが、列強の圧迫から中国は『社会主

義国』をとらざるをえなかったということ。社会主義の理念は『国民は皆平等』であり、その理念にしたがって経済活動の主導権を政府がにぎっています。土地は公有地であり、会社は国営企業を中心です。つまり『個人の能力の差によって自由競争的に経済活動をする』ことを認めないわけですね。これは資本主義の理念である『自由経済』と相反する考えかたです」

つまり、長い歴史と社会主義の思想が先進国経済との交流を妨げ、世界的に主流である資本主義主導の近代化に遅れを取ってしまったわけだ。

## 世界で初めての社会主義国家に市場経済を入れる試み

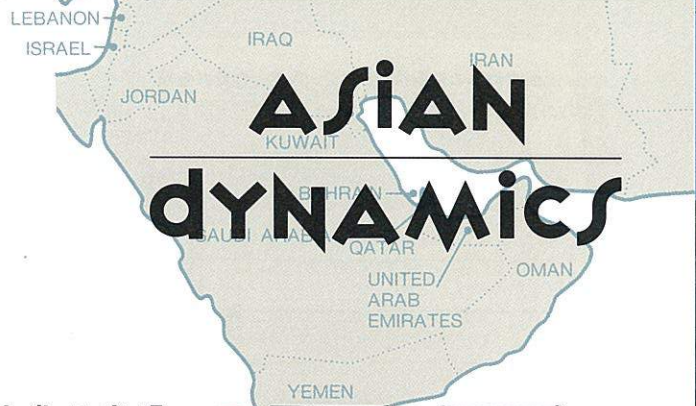
だが中国政府は1979年の開放政策以来、外国企業の優遇政策を通じて積極的に自由経済

を招致している。また外国企業も、中国という21世紀最大の消費市場を目指し、続々と参入を開始している。それは「浦東地区開発プロジェクト」でも例外ではない。既に日本企業も浦東地区に土地を購入し、オフィスビルなどの建設を進めている。

こうした急激な近代化への波は、何によってもたらされたのだろうか。小島教授は、「国内の需要が拡大していることが最大の要因」と語る。

「内需は国民の消費が中心になります。マスメディアや自動車などの発達によって中国国民が新しい生活様式や価値観を覚えたわけですね。欧風の家に住み、高速道路をドライブし、テレビやビデオを見ながら過ごすようになった生活が、若い世代を中心に浸透し始めたんですね。加えて漢民族はその歴史が示す通り能力が高い。また中でも上海は、昔から貿易港として海外との接点が多い都市なので、外国人や異文化の風習などへの適応能力もある。浦東の開発は、表面的には政府や外国企業主導で進められているように見えますが、実は市民の旺盛な消費需要や能力の高さがけん引役となったプロジェクトと言っているでしょう」

社会主義と自由経済の共存は世界的にも前例がない。だがその根底にある中国国民の未知数のパワーは、主義や思想をすでに超越した「天空界」にあるのかもしれない。



# アッサラーム アレイクム

『イスラム原理主義の台頭に揺れる中東』

現代史において世界最大の産油地帯として世界経済の原動力となってきた中東。米ソの冷戦下では「世界の火薬庫」と称され、東西軍事バランスの要でもあった。その中東が今、「イスラム原理主義」の台東に揺れている。世界三大宗教の一つに数えられ、6億人の信徒がいると言われているイスラム教。サファヴィー朝ペルシア、オスマントルコなどかつて世界を席巻した大帝國を形成してきた中東の象徴とも言える宗教である。だが、イスラム原理主義の台頭によってひきおこされた動揺は、地球の裏側まで走った。



イスラム原理主義をすべてテロリズムと捕らえるのは誤りである。「政治的原理主義者」と呼ばれる過激派はごく一部であり、ほとんどの主義者はボランティア活動などを通じて(貧困生活からの脱却)と(環境破壊への反発)を訴える穏健派だ。

## イスラム教と 原理主義の正体

キリスト教、仏教と並ぶ世界三大宗教のひとつ、イスラム教。多くの女性は顔をベールで覆い、1日5回礼拝を行う。ラマダーンと呼ばれる断食があり、年に一度聖地メッカに巡礼を行う。一般的にイスラム教に対しては、非常に厳しい宗教というイメージがある。

「確かに戒律は厳しい。しかしそれは、聖職者やヒエラルキー(階級)を一切認めないなど合理的なことを言っている場合が多い。商人の存在をはやくから肯定するなど他の宗教より非常

に近代的な面をもった宗教だともいえるでしょう。自由度が非常に大きいんです」

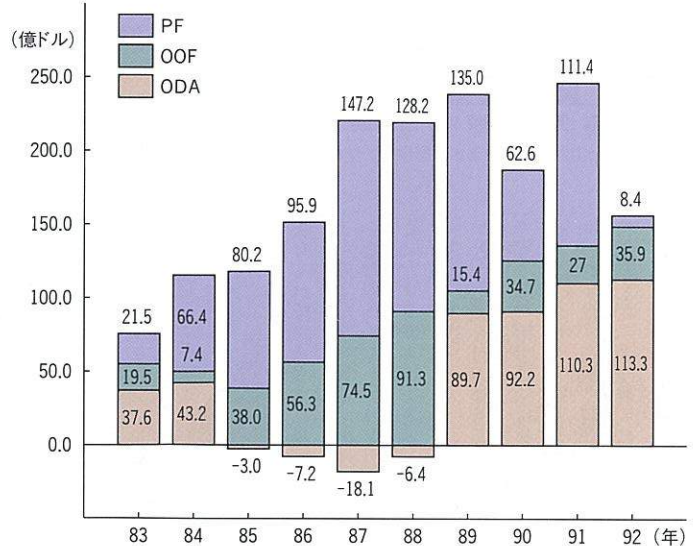
中堂幸政助教授(国際関係学科)は語る。

「中東は、米ソの冷戦下ではその戦略的な立地条件が評価され、世界最大の産油地帯として多額のオイルマネーが流入しました。それが、ソ連崩壊による冷戦構造の消滅で激減してしまっただ。この中で、かつてのイスラムに戻ろうという原理主義が台頭してきたわけです」

《イスラムの原点に還れ》

原理主義者たちのそうした主張は、石油の暴落から始まった経済貧困にあえぐ国民に、一筋の光明を差し伸べるかに見えた。

日本の経済協力(支出純額ベース)





# 産油地帯を襲う オイルショック の反動

中東といえば石油である。石油資源をほとんどたない日本にとって、中東は欠かせない存在だ。70年代に起こった2度にわたるオイルショック（原油価格の急激な値上がり）は、日本を始めとする石油輸入国にとっては大きな痛手となった。だが逆に、産油国には巨万の富をもたらしたのである。アラブとイスラエルの対立も、実はユダヤ人とアラブ人の民族対立の殻を被った「石油の奪い合い」に過ぎなかった面が強い。

「しかし石油資源の発掘は国土の砂漠化を加速しました。さらにオイルショック後の石油価格の下落は、突然富を得て浪費に慣れてしまった中東の人々の生活にも影響を与えました。外貨の獲得手段がなくなり、多くの国では今ではほとんどの大卒者に職がないほどの経済停滞ぶりです。だから経済社会への絶望、西欧的資本主義への反発が高まっているのです。その象徴が、イスラム原理主義の台頭です」

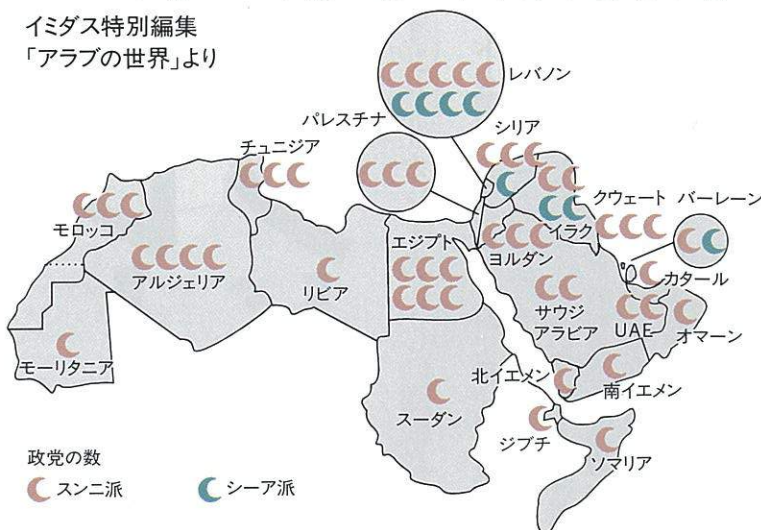
オイルマネーの流入、それに伴う西欧文化の流入によって乱れたイスラム世界を、かつての伝統的なイスラムの教えによって浄化しようというのが、イスラム原理主義の目的である。

## イスラム 原理主義と 政治的原理主義者の違い

イスラム原理主義者の犯行とされる、93年のニューヨークの世界貿易センタービル爆破テロ事件は記憶に新しい。また昨年12月にはフランスのマルセイユでエアバス乗取り事件を起こしている。イスラム原理主義者といえば、すべてテロリストとのイメージがある。

「それは大きな間違いです。私は過激な行動を取る原理主義者を『政治的原理主義者』と呼ん

イミダス特別編集  
「アラブの世界」より



で区別していますが、それはごくごく一部。対してほとんどのイスラム原理主義者は、ボランテニア活動などを通じ、貧困に苦しむ人を救おうとさまざまな活動をしているんです。彼らの主張は《貧困生活からの救済》と《生活文化・環境破壊への反発》。どこか間違っていますか」

原理主義者の目指すものは、西欧文化に侵略される前の伝統的イスラムの教えに従い、平和な生活をおくることである。そうした主張を国民の多くが支持する以上、西側はその選択に従い、外交の限定を超えた内政干渉を改めるべきであろう。

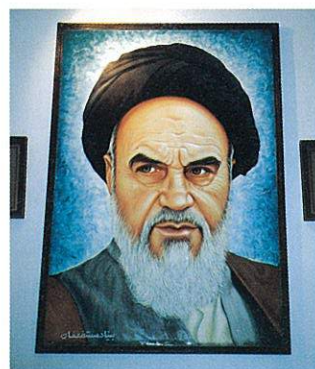
『アッサラーム・アレイクム』。これはイスラム教徒の日常的なあいさつの言葉である。英語に訳すと『peace on you』。真のイスラム原理主義者は、戦争や国家的対立を望むものではないはずだ。

## イスラム 原理主義を 恐れる 西側諸国の本音

イスラム原理主義の台頭を恐れているのは、実は米国をはじめとする西側諸国であるといわれる。

中東では、現在でもイスラム教が深く政治と関わっている。数年前までイランではイスラムの僧侶であるホメイニ師が政治

的指導者だった。政治に宗教色の少なくない日本ではなかなか想像しにくい状況だが、つまり宗教宗派が選挙キャンペーン活動の決め手になるのだ。



欧米思想を全面的に否定し、イスラム共和国を築いたホメイニ師は、現在でもイスラム原理主義の象徴的存在である。

アジア諸地域の政治動向を管理してゆこうという発想を持った政治家も多い。彼らはここ数年続いた欧米中心の世界秩序が乱れることを恐れている。だから宗教と政治とテロを区別せずに批判を続けるわけです」

中堂助教授の批判は、西側諸国にも向けられる。

「日本をはじめ非産油国はイランにODA（政府開発援助）などの経済援助をしています。米国はこれにも支援をするなど圧力をかけている。しかしイランの国内経済の発展という視点から言えば、こうした発想は一面的です。イスラムとの対話によって、新しい国際関係を前向きに構築して行くほうが自然な発想ではないでしょうか。同時に日本は日本、石油に代わるエネルギーの開発や、省エネ技術システムの開発や、環境破壊の防止などにこれまで以上に尽力すべきでしょう」

西側文化を否定する原理主義の台頭は、先進諸国にとって脅威と言える。「政教分離」が常識の西側にとって、そうした宗教国家が国際社会にあらわれた場合、少なからず秩序を乱す可能性がある。同時に彼らの主張が国際社会の場で影響力を持ちはじめると、西側諸国とイスラム原理主義の対立という新たな「火種」が生まれる。米国クリントン政権やNATO（北大西洋条約機構）ら西側の指導者たちがイスラム原理主義を批判するのはそうした背景がある。

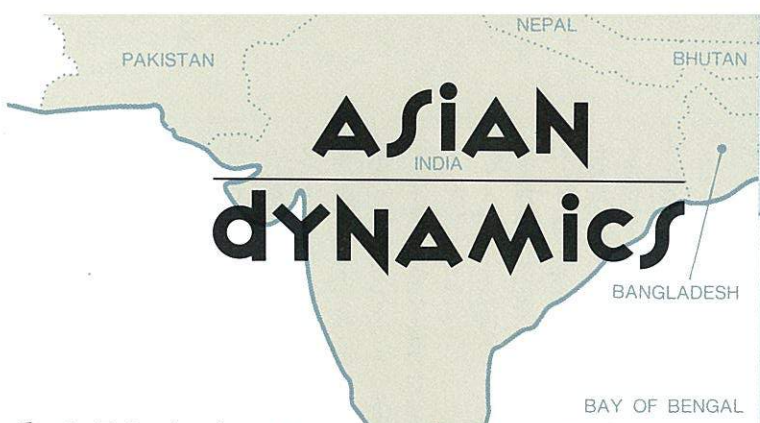
だが見落としてはならないのは、西側の主張には、宗教としての「イスラム教」と、政治勢力としての「穏健派」イスラム原理主義、そしてテロリストグループの「政治的原理主義者」を混同して脅威論を唱える傾向がある事である。

「米国の中には、イスラム原理主義の脅威を口実に台頭著しい

### 中堂幸政 (ちゅうどうゆきまさ)

国際関係学科助教授  
幼稚園から小学・中学・高校と、宗教に縁の深い環境で育つ。また大学時代に学んだ経済学で、中東における経済社会の仕組みに興味を抱き、以来中東と宗教の近代化の関係などを研究する。「先入観を捨ててイスラム教徒と接してください。彼らの自由な発想に驚かはずです」と語る。





# ASIAN DYNAMICS

# カレーだけでは語れぬ インドの食文化

## 『インド＝カレーの正しい理解』

インドと聞いて、最初に何を頭に思い浮かべるだろうか。カースト制度、ヒンドゥー教、マハトマ・ガンジーなど、それぞれのイメージがあるだろう。しかし、ほとんどの日本人が思い浮かべる共通項目がある。「カレー」だが、私たちが普段食べているカレーはあくまでも「日本風カレー」である。では、本場「インドカレー」とはいかなるものか。インドの人々が香辛料を好むのはなぜか。そうした疑問への回答は、インドの食文化への追求なくして語れない。

## 二つと同じ 味が無いインドの 「家庭の味」

インドの夏は暑い。かなり北部に位置する首都デリーでさえ年間平均気温が軽く20℃を超え、5月～7月など月間の平均気温が30℃を超える。こうした気候の特色は、インドの食文化に2つの影響を与えた。ひとつは、食欲を促進する刺激物が必要であること。もうひとつは、暑さに強い、すなわち「腐りづらい」食材が必要であることである。その結果誕生したのが、諸種のスパイスを混ぜ合わせて作る料理、すなわちカレーである。

カレーは、日本で目にする固形ルーやアルミパックのレトルトはあまりない。日本ではライスは日本人ならライス。インド人は何で食べる？

トが本来の姿ではない。何種類もの香辛料を混合して作るのが本道だ。主に使用される香辛料は30種類近くある。その中から、好みにあわせて数種類を混合するのが。だから、作る人、家庭によってカレーの味は違う。黄色くないカレーもある。十人十色という言葉があるが、インドでは「十人十カレー」なのである。ちなみに同じインドでも南部に行けば行くほどカレーが辛くなる傾向にある。



広大な雑穀畑。茎葉は、重要な家畜飼料となる。

「もちろん、これは一般論であり例外もあります。たとえば、一部の不可触民はヒンドゥー教を信仰しながらも牛肉食を行ってききました。ヒンドゥー社会が牛の死体処理を不可触民に強制してきたためです。また、都市部の中産階級のなかには、因習にとらわれないことを「証明」するためにあえて牛肉食を行う若者も増えてきました。面白い

スで食べるのが一般的だ。本場インドではどうだろうか。「チャパティー」という薄焼きパンや日本でもおなじみのナン、ライスは主ですね。ただ、地域によってかなり異なります」。インドの社会や食文化を研究する篠田隆助教授（国際関係学科）は語る。

「農業技術の革新と大規模な灌漑用水の整備の賜物です。事実、州政府主導の灌漑のためのために、雑穀が主体となった西部でも、米や小麦の生産が始まった。」「ヒンドゥー教徒は牛肉を食べない」というのは本当？

「エ」などの雑穀を主体にしていた西部でも、小麦畑が次々に誕生しました。住民の生活水準も向上し、雑穀が一般的だった農村地帯でも、小麦を食べることがステータスになっているんです」。カレーは地域によって「何で食べるか」が異なる。しかし最近の傾向では、小麦の急激な普及もあり、「チャパティー派」が増えてきている。